

環境に調和する街づくりを

小樽再生フォーラム（小樽市）

坂道を辿って、ゆっくりと歩く。小樽運河沿いの観光スポットからちょっとはずれたただけなのに、人波と観光バスがかき立てる喧騒は消えて、ひっそりと佇む古びた赤レンガ造りの建物が見えてきた。

うっそうと茂った蔦が、2 階の屋根にまで達している。明治時代に倉庫として建造され、いまはレストランとして使われている。

しばらくして、今度はいかにも和風商家ふうの木造建築物が現われた。石造りの蔵を備えている。近づくと、喫茶店だった。

明治時代建造のままの太い柱や梁、床板が生かされ、郷愁をそそる落ち着いた雰囲気がかもし出している。

旧日本銀行小樽支店の通りに入る。かつての小樽の繁栄ぶりを象徴するこの建物は、4 隅に塔屋を立て、レンガ造りを基本に、腰部と窓・出入口回りに花崗岩をあしらひ、外面はモルタルを塗って石造りふうに仕上げている。

明治時代の重厚な建造物で、いまは金融資料館となっている。

「長く小樽に住んでいるけど、ちゃんと見たのは初めて」「いや、こんな素晴らしい建物は、知らなかった」

年輩者から若者まで、ざっと 30 人の市民の間から、歓声が上がった。

■ 景観の歴史的意味を再認識

小樽再生フォーラム（篠崎恒夫運営委員会議長、会員 30 人）が毎年、2、3 回、実施する「まちなみ見学会」。専門家らの解説に耳を傾けながら、レトロな味をいまに生かした歴史的建造物を見てまわるイベントである。



歴史的建造物を見て回る「まちなみ見学会」
（レストラン「海猫屋」）

「市民に小樽の景観の歴史的意味を再認識してもらい、観光関係者らとの連携を図ろう」と、運河や倉庫群を対象にした「親と子のスケッチ会」などの催しも毎年夏、実施している。

毎年 5 月の花見は「自然を生かした公園化を提言した」なえぼ公園で、12 月の総会・忘年会会場は歴史的建造物を活用した料亭などで、と小樽再生フォーラムならではの会員交流・親睦の「場」づくりをしてきた。事務局会議、運営委員会も随時、開いている。

小樽再生フォーラムは 1985 年、当時小樽商科大学教授だった篠崎さんらが結成した。会員の大半が地域住民。職業もまちまちだ。年会費 1 人 3000 円を出し合って、運営している。

会則・前文に「美しい自然と豊かな歴史的遺産の中に育まれた私たち小樽市民は、このかけがえのない環境に調和する新しいふるさと小樽の発展を希求し、広汎な市民の平等な参加に基づく小樽再生の町づくりを実現するために、ここに小樽再生フォーラムを設立する」とあって、町並み保存に活動の重点を置く。

昭和 40 年代から 50 年代にかけ、行政の小樽運河埋め立て・路面拡張方針が浮上、進められようとしていた。かつて「北のウォール街」とも称され、経済港湾都市として栄えた小樽だが、観光に頼らざるを得な

い現実があった。

市民らの「小樽運河を守る会」が「全面保存」を唱えた。かつての繁栄ぶりを伝え、レトロの味がある運河を残してこそ小樽であり、観光ではないか、と。

そのさなかに、全国町並み保存連盟が小樽で「全国町並みゼミ」大会を開催、小樽運河埋め立て・保存の是非が、全国的な関心事となった。

結局は運河の半分が埋め立てられたが、残った運河周辺に散策路やガス灯が整備され、いまや一大観光スポットとなった。

半分になったとはいえ、運河あつての「観光地・小樽」であり、運河一帯は 1996 年には国土交通省の「都市景観 100 選」に選ばれた。



未来に託す「親と子のスケッチ会」を終え、記念撮影

小樽再生フォーラムは、運河保存運動の後継団体として設立された。篠崎議長は言う。「古くからの建造物を歴史的遺産としてとらえ、保存する活動を通じて、市民の復権とか、住みやすいマチに、との思いがありました」。

公開シンポジウムや地域懇談会、行政に対する提言、対話など、多様な活動を展開してきた。マチの経済人、大学関係者らも活動に加わって、実効ある活動となっているが、頭が痛いのは景観を損なうマンションなど高層建築物の相次ぐ出現。

■ 高層建築物の建設に立ち向かう

小樽市は運河埋め立て着工の翌 1978 年「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」を制定、2006 年には「特別景観形成地区」を拡大して高層建築物の建設にいつその制限を付したが、石造り倉庫群などの指定区域に隣接した指定外の地区に高層マンションが建設される事態が続いている。

小樽再生フォーラムは、そのたびに「景観の価値を著しく損なう。^{しんじん}深甚な配慮を」などと、付近の景観にマッチした高さ、大きさ、デザインに改めるよう、行政と業者らに求めてきた。

論拠とするのは、小樽市が 2006 年に、歴史ある街並みを将来にわたって守るため、景観法に基づく「景観行政団体」となって

策定した「景観計画」（平成 20 年度施行）。

「景観計画の『行為の制限』条項には『登録歴史的建造物の隣接地では、これらと調和した高さとする』と、建築者の考慮を促がしています。建設反対の動きが表立って盛り上がるまでには至っていませんが、救いなのは私たちの署名運動に千人もの住民がすぐに応じてくれたこと」と、篠崎議長は考える。手ごたえはある。

小樽再生フォーラムは 2009 年、小樽の歴史的建造物を写真とイラストで紹介するハンドブック「小樽たてもの散歩」を発刊した。

B6 版 68 ページのフルカラーで、持ち運びに簡単だ。JR 駅周辺、色内、手宮、堺町など 7 地区に分けて、87 の建造物を、地図付きで建設時の名称と現名称、建物の詳細などを掲載している。



発刊したハンドブック「小樽たてもの散歩」

JR小樽駅（旧国鉄小樽駅）は「ホームに面した窓には硝子の町小樽の象徴ランプが掲げられている。玄関を出ると小樽港が目に見え、飛び込んでくる」。小樽市公会堂（旧小樽区公会堂）は「その外観から時代背景を表すドラマなどに使われている。建物の奥には能舞台が移築されている」。

味のある紹介ぶりである。

会員たちが 2006 年ごろから「建築史の専門家ではない、一般市民の目から建物をとらえよう」と、手分けして取り組んできた。それだけに、一見して楽しめる中身になった。

市内の書店や運河プラザ、ホテルの売店などでも販売した。初刷の 2 千部はたちまちさばけ、増刷した。

■ 歴史的建造物を現代に生かして

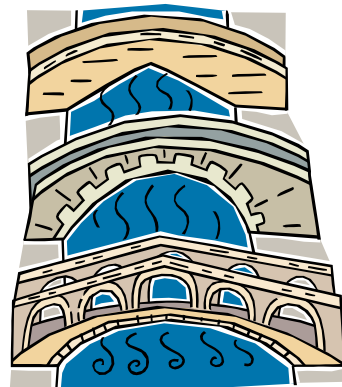
地道な活動に徹して、設立から 15 年の歳月を刻んできた。特別景観形成地区に隣接して林立するマンションなど高層建築物建設の勢いを抑えられないだけでなく、新たな課題も出てきた。

かつての「小樽運河保存」運動の記憶が薄れるにつれ会員数がじわり減って、高齢化する傾向にある。行政の財政難から助成率が低下している。

こうした困難を乗り越える一つの手段として、小樽再生フォーラムはまちなみ見学会やスケッチ会など「市民との接点を増や

し、市民との交流を図る」活動を重視している。

例会、研究会、講演会を随時、開催している。市長懇談会をはじめとする行政との交流もさらに進めていく。



■ 連絡先

〒006-0002 札幌市中央区北 2 条西 13 丁目 1-9
ラピスガーデン北 2 条 1003 号 篠崎恒夫方
TEL/FAX : 011-281-7588
Email : shinoz@t.email.ne.jp